

鮎川哲也探偵小説選Ⅲ
目次

悪魔博士	2
あなたは名探偵になれるか	43
白鳥号の悲劇	54
虫原博士の死	67
一夫と豪助の事件簿	
ビーナスの涙	83
暗号の手紙	94
怪盗Q	107
黒い暗号	119
南海荘事件	159
和歌の秘密	171
消えた足跡	186
祭りの夜の事件	199
黒い十字架	212
呪いの家	225

ダイヤルのなぞ	238
風さわやかに	251
矢助のたましい	262
空気人間	274
水仙の秘密	285
時計塔	296
茶色の壁	308
クシヤミ円空	318
黄色い切手	331
冷凍人間・補遺（第六回）	347
巻末資料 『風の証言』 作品ノートより 鮎川哲也	359
特別寄稿 鮎川作品との出遭い 麻耶雄嵩	361
【編者解題】	364

凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」（昭和六一年七月一日内閣告示第一号）にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。
- 一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

鮎川哲也少年小説コレクション 下

悪魔博士

挿絵・小林久三

ナゾの医者

冬彦ふゆひこはあすの予習をすませてしまおうと、夜の空気をすうために、ブラリと散歩にでた。

十分ばかり歩いて中学校の前にさしかかったときのことである。

「おい、おまえは少年探偵の森冬彦だろう。ちがうか？」

とつぜん、ポプラ並木のかげからとび出した男が、冬彦の前に立ちほだかった。

「そうだよ、ほくは冬彦だ、きみはだれ？」

「うるせえやい。だまってあの車に乗れ。さわぐと射ち殺すぞ」

グイと少年のわき腹にかたいものをつきつけた。暗い

夜だからよくわからないが、ピストルらしい。車道に、テールライトを消した小型自動車か、ひっそりと停車している。

こんなバカ者とあらそって、けがをしてはつまらない。それよりも、逆にこのチャンスを利用して、相手の正体をさぐってやろうと森少年は決心した。

「こつちへ来い、目かくしをしてやる」

男はハンカチで冬彦に目かくしをしようと、オーバーのポケットから麻ひもとりだして、少年探偵の両手をかたくしばってしまった。そして冬彦のからだをうしろの座席になげこみ、自分は運転台にのりこんでアクセルをふんだ。

車はスピードをあげて走った。冬彦は車のゆれ方と、外部からきこえてくる物音とによって、町を通りぬけたら、十字路でストップしたり、鉄道をこえたり坂をのぼったりしたことを知った。

（いったいこの男は、ほくをどこへつれて行くのだろうか。どんな用があるのだろうか……）

冬彦の心のなかには、このような疑問が、たえずウズをまいていた。しかしともと冒険好きの冬彦少年だ。少しもおそろしいとは思わない。

夜風を切って三十分あまり走ったのちに、車はようや

く止まった。目的地についたらしい。

「おい、降りるんだ！」

男はしわがれた声でそう言うと、冬彦のうでをつかんで、車の外につれだした。東京の郊外なのであろう、静かなところだ。遠くのほうで犬が吠えていた。

目かくしをされたままコンクリートの道を歩いて、石段をのぼる。男がドアをコツコツとたたくと、やがて内側にくつの音がして、ギイイ……ボタンと音をたてて開いた。きみのわるい、いやな感じの音だった。病院を思わせる消毒薬のにおいが、冬彦の鼻をプンとついた。

「先生、つれて来ましたぜ」

「ごくろうだったな。もういいから、目かくしをはずしてやれ」

先生とよばれた男が、おちついたバスで言った。ロシアン人のようなふとい声だ。

冬彦は目かくしをはずされ、なわをほどこされた。ガラんとした感じの陰気な建物で、やはり病院にちがいない。目の前に白い手術衣をきてメガネをかけ、あごひげをばやした大男と、背がひくくくてやせた、カッパに似た男が立っている。

「フフン、これが少年探偵の森冬彦か。よろしい、さつそくあさつての実験につかってみよう」

へびを思わせるひとみに冷たい光をたたえて、ひとりごとのように言った。

「おじさん、どんな実験です？」

「ウフフ、いまにわかるよ」

医者はニタリと笑いながら答えると、

「おい、三平さんぺい、こいつを十三号室へぶちこめ！」

と命じた。冬彦をゆうかいして来た男は、三平という名まえらしい。

「ごぞう、おれといっしょに來い。逃げようとしてもダメだぞ、いいか」

冬彦は三平にうでをつかまれて、うすぐらい廊下を、さらに、奥のほうへつれてゆかれた。ところどころの天井に、六十ワットぐらいのはだか電球がともっている。

両側にずらりとならんだ扉は、入院患者がはいる病室だろうか。どれもピタリと閉ざされて、ヒツソリとしていた。

やがてふたりは十三号室と書かれたドアの前までやって来た。三平はカギ穴にカギをさしこんでドアをあけると、

「ごぞう、ここがおまえのへやだ。それッ！」

力まかせに冬彦をつきとばすと、すばやく外から扉をとしてカギをかけた。



「アハハハ、こぞう、ぐつすりねむれよ」
あざけるように言うと、あらあらしい足音をたてて行ってしまった。あたりはふたたびシーンとしずまりかえ

る……。

——すると、だれもいないと思っていたへやのすみから、だしぬけに、

「ぼっちゃん……」

三平によく似た、しわがれ声がかきこえてきたではないか。はッとしてそちらを見ると、壁ぎわのベッドに寝ているものがある。そろりそろりと起き上がったその顔を見ておどろいた。なんとこの男は頭から足の先までまっ白いほうたいでグルグルまきにされて、目も鼻も口もわからぬノッペラボーではないか。

冬彦は思わず目をみはった。

悪魔の手術

（この人は入院患者なんだナ）

冬彦はすぐそう考えた。ここは病院なのだから、けが人や病人がいるのはあたりまえだ。

「わたしはネ、本郷ほんごうのげた屋の主人で、原田はらだ栄助えいすけというものです。二十日ばかり前のある晩、用があつて外出したところ、あの三平という男にピストルをつきつけられて、ここにつれて来られたのです」

「あれ、おじさん入院してるんじゃないの?」

「とんでもない。家に帰りたいけれども、帰らしてくれないのです。手紙も書かせてくれないうし、電話もかけさせてくれない。だから家族のものは、わたしが死んでしまったと思ってるでしょう」

原田栄助は、かなしそうに言った。

「ぼっちゃん、あごひげの医者を見ただしよう。わたしはあの医者に麻酔をかけられて、ねむらされてしまったんです。目がさめてみると、こんなふうにはうたいされていたのですよ」

「麻酔をかけて、どんなことをしたんです?」

「それが自分でもわからない。ただ気がついたのは、このように声がいわがれてしまったことです。じまんじやないが、もとのわたしはとも声がよくて、歌をうたうと、人がほめてくれたものでした。だから、声帯を手術されたことはまちがいありません」

声帯の手術! それをきいたとたん、冬彦はまたもやゾツとしたのである。何の目的で声帯の手術をやるのだろうか。しかも、ただたんに声帯を手術しただけならば、全身にほうたいをまく必要はない。

(そうだ、この人は声帯ばかりでなくて、もつとほかの場所も手術されているにちがいない)

雪ダルマのようにまっ白な原田栄助をながめながら、

冬彦がそのように考えていると、どこからか人間のうめき声のようなものがきこえてきた。……かなしそうな、くやしそうな、はらわたをちぎられるような声である。

「おじさん、ほら、あのうなり声……」

「うなり声? わたしにはちつともきこえないが……」

原田栄助は、海ぼうずのようなノツペラボーの首をかたむけて、耳をすませた。

……きこえる、きこえる。とぎれたり、つづいたりしながらかすかに、まるで大地の底からもれてくるようなうめき声だ。

ところが、それをきいた原田栄助は、ハツとしたように顔色を変えた。いや、ほうたいをしているから顔色が変ったかどうかわかるはずはないのだけれども、あきらかに声の調子が変わっていた。

「ぼっちゃん、きいてはいけない。あの声がやむまで、耳をふさいでいなさい」

まるで悪魔ののろいをきいたように、おそろしそうに声をふるわせている。

「なぜです、なぜきいてはいけないんです?」

しかしその質問に対して、原田栄助はだまって首をよこにふるのみである。……まもなく、うめき声はブツリ

とやんでしまった。

地底の囚人

冬彦にとっては、すべてがナゾであった。あのうなり声はだれだろうか。あさって行われる実験というのは何であろうか。また、げた屋のおじさんがうけた手術はどんなものであつたらうか。数々の疑問を考えていると、なかなかねむれない。

どこかで、ポーン……ポーンと二時をうつ音が、かすかにきこえてきた。原田栄助は小さなイビキをかいて、ぐっすりねむっている。

(そうだ、病院のなかを探検してやろう！)

冬彦はそう考えると、そっとベッドからすべりおりて、ドアに近づいた。冬彦のような少年探偵にとっては、扉のカギをあけることは目をつぶっていてもできる。くつの底皮の間にかくしてあるふとい針金をとりだして、先端をまげると、そっとカギ穴にさしこんだ。そしてひとねじり。

そっとドアをあけて、廊下にてた。天井のはだか電球が、真夜中の病室の前をさむざむと照している。冬彦少

年はそっと左右を見わたした。と、その耳にまたもやきこえてきたのはあのうめき声だ。おそろしい夢をみてうなされていような、うすきみ悪い声……。

ひきつけられるように、冬彦は声の方向へ足をふみだした。人かげひとつないうすぐらい廊下を、ぬき足さし足で進む。途中で声はやむと、ふたたびうなりだすまでじーっと待たなくてはならない！

どうやら声は、地下からきこえてくる。

(そうだ、地下室にちがいない)

冬彦はそう気づくと、地下室の入口をもとめて、なおも廊下をさまよい歩いた。すると、ある角を曲ったところに、暗い階段のあることを発見した。うめき声は、まぢがいなくそのなかからきこえてくる。

冬彦はポケットのシャープペンシルを手にとつて、キヤップをはずした。ボタンをおすとパツとあかりがついて、懐中電灯になる。足もとを照しながら、一段……二段……三段……。おりるにしたがつて、うなり声もしだいにハッキリしてくる。

二十一段の階段をおりて、コンクリートの床の上に立った。まるい光の輪が、地下室の天井を、壁を、そして床をさぐっていく。あちらこちらにクモの巣がかかっている。

最初にボイラー室があったが、ボイラーは止まっていた。つぎに物置。こわれたイスやソファーがぶちこんである。だが、うなり声のもれてくるのは、ここでもない。冬彦は、ついにいちばんおくのへやの前に立った。ピツタリと閉じられたドアのすき間から、ひとすじのぼい光線がもれている。

冬彦はヤモリのように、その扉にからだをくつつけて、なかのようすをさぐるうとした。最初のうちは、何をうめいているのかわからなかったが、耳がなれてくるにしたがつて、理解することができた。

「……かえせ……かえしてくれ。あくま、悪魔め……」
うめき声の間に、ときれとぎれにこんなことをつぶやいている。

(返せ、返してくれと言ってるけど、何を返せというのだろう?)

冬彦はそつと首をかしげた。悪魔というのは、あのあごヒゲの医者することにちがいない。この男の人は、医者になにかを奪われたのだ。だから寝ている間もそのことが忘れられずに、うわごとのように、それを返せと言いつづけているのだろう。

冬彦はこの男の人に同情した。ドアをそつとノックすると、

「おじさん……おじさん……」

と声をかけた。だがつぎの瞬間、冬彦は思わず身をかくして、懐中電灯のあかりを消さねばならなかった。階段をおりてくるだれかの足音がきこえたからだ。

……まもなくランプを持った三平の姿があらわれた。ランプの光にてらされて、三平の目玉はギラギラとかがやいてみえる。

「おい、こぞう、そこでなにをしてるんだ!」

忠告

三平は、しかし思ったほどには怒らなかつた。冬彦の手をひきずるようにして階段をのぼると、近くにある十号室と書かれたドアをあけた。

「おい、今夜はここで寝るんだ。いいか、こぞう、二度と地下室へおりたら承知せんぞ」

三平は、ベッドのはしに腰をおろした冬彦の顔をギョロリとにらんでそう言った。

「ウン、もう行かないさ」

「よし。それからおまえ。おもしろい懐中電灯をもっていたな? ちょっと見せろ」

冬彦がまだ返事もしないうちに、三平はすばやくポケットからシャーペンシルをひきぬいて、いじりはじめた。紙きれにへたくそな文字を書いてみたり、キャップをはずして光を点滅してみたり、たいへん感心したふうである。

「フン、チンピラのくせに、なかなかいいもの持つてるじゃねえかよ」

三平はそう言つて、シャーペンシルを返してくれた。だが、はからずも三平のこの行為が、あとで非常に役にたったのである。なぜかという、シャーペンシルのじくの上に、三平の指紋がベタ一面についていたからだ。やがて三平は扉にカギをかけて出てしまった。冬彦も今夜の冒険はこのくらいにして、寝ることにして、ベッドにもぐりこんだ。へやのすみで、生きのこったコロギが、かすかな声でないでいた。

「おい、起きろ、起きろ！」

ゆすぶられて目がさめた。もうすっかり夜があけて、すがすがしい朝の光がさしこんでいる。

「さあ、めしを持ってきたぞ。たべろ！」

三平は盆をテーブルの上において、出ていった。大きなどんぶりのごはん、みそしると、タクアン三きれ。そまつな食事だが、おなかのすいている冬彦にはとても

おいしかった。

食事がすんで三十分ほどしたとき、ふたたび三平がやって来た。

「フン、よくたべたな。感心感心。実験をやるまでに、うんとふとつてくれよ」

こんな、うすきみわるいことを言うと、冬彦を廊下につれだした。どこへ行くのかと思ひながら歩いていると、つれていかれたへやは、はじめに入れられたあの十三号室であった。

「おお、ぼっちゃん、どこへ行つてたんです？ 心配しましたよ」

ほうたいをグルグルまきにされた、ノツペラボーの原田栄助が、なつかしそうに言った。

「おはよう、おじさん」

冬彦は元気よくあいさつしたのち、

「ぼく、夜中に地下室を探検にいったんです。そして三平にみつかっちゃって、いままで十号室に入れられていたんですよ」

「なに、地下室へ？ ほう……」

栄助はぶるツと身ぶるいをして、

「あぶない、あぶない。よくぶじでもどつて来た。ぼっちゃん、もう二度と地下室へ行つてはいけません」

しんせつに注意してくれるのである。

「なぜですか？」

「いや、そのわけは言えない。言うとな、あの悪魔にわたしが殺されてしまうからです。ほっちゃん、もうけっして地下室へ行かないことを、おじさんに約束してください」

原田栄助は、まっ白い、目も鼻もない顔をこちらにつき出すようにして、ねっしんに言う。

「ウン。ほく、もう行きません」

冬彦はキツパリと答えた。だが心のなかでは、あの秘密をきつとしてみせるぞ、と固く決めていたのである。

ああ、地下室にとじこめられている人間はだれなのであるうか。

みどりの扉

朝の十時ごろのことだった。いきなり扉があくと、三平が首をつきだした。

「おい、おじさん、おれといっしょに来てくれ！」

「え？ どこへ行くのかね？」

原田栄助は、死刑執行人によびだされる囚人のように

ふるえながら、不安そうにきいた。

「もんくを言わずについで来い！」

三平は、いやがる原田栄助のうでをつかんで、ズルズルとひきずりながら、むりやりにつれ出していった。

(何をするつもりなんだろう?)

冬彦も胸さわぎを感じて、じっとしていられない。くつ底の間から例のハリガネをとりだして、扉のカギ穴にさしこんだ。ドアはすぐ開いた。

はるか廊下のむこうのほうで、三平のどなる声がきこえる。冬彦はその方角に向かって、足音をしのばせて走った。

まがり角でようすを見ると、原田栄助は、いままさにみどりの色の扉のなかにひきずりこまれるところだ。扉の上には、『手術室』というふだがさがっている。

(悪魔博士のやつ、また何かの手術をやる気だな?)

みどりの扉がピタリと閉じられるのを待って、ソロソロと近づいた。すぐ目の前にカギ穴がある。冬彦は、しめたとばかり、そこから中をのぞきこんだ。

中央の手術台に、栄助がねかされている。

その足もとに、三平が立っていた。見れば見るほどカッパにそっくりだ。

白い手術衣をきた悪魔博士は、三平に手つだわせて、



栄助のホウタイを、足の先からスル、スル、スル……と
ほどきはじめた。

二本の足があらわれ、腹があらわれ、やがて胴があら
われてくる。ふたりは休むことなく原田栄助の両手のホ
ウタイをはずし、最後に頭と顔のホウタイをとりのぞい
た。

博士と三平は上体をおりまげて、しばらく栄助の顔を
のぞきこんでいるふうだったが、やがて博士は、さも満
足したように、フームとうなった。

「先生、おめでとう。とうとう成功ですぞ」

三平もこうふんしたように声をふるわせて、博
士の手をにぎった。

何が成功だというのであろうか。あいにく
悪魔博士のからだのかけになっている
ため、ざんねんながら原田栄助の顔が
みえない。

「おい原田、ゆっくり起き上
がってみろ！」

博士が命じた。原田栄助はそ
ーッと起き上がる。博士のから
だのかけになっていた顔が、ヌ
ーッと出てきた。だが、それを

みた冬彦は、思わず、うツとうめいたのである。

見よ、栄助の顔は、目も、鼻も、口も、かみの毛も、ひふの色も、何から何までが、カッパの三平そっくりにできているではないか。

「おい三平、こいつに鏡をみせてやれ」

原田栄助は、その鏡をみて、はじめて自分の顔の変化を知った。しばらくの間鏡をみていた栄助は、あまりのおどろきなことばもでないらしかったが、やがて、みるみる顔をまっかにそめると、

「ちくしょう、よくもわたしの顔をこんなふうにしたな！ 悪魔医者めッ！」

ああ、その声までが三平そっくりなのだ。

「ハハハ、わしは長い間の研究ののち、かずかずの失敗をかさねて、ようやく完全な整形手術の方法を発見したのだ。この三平をモデルにして、三平とそっくりおなじ男をつくることのできたのだ」

博士はとくいになって、しゃべりだした。

「いや、ただ似ているだけでは完全でない。おまえの十本の指の指紋も、この三平とそっくりおなじものに変えてあるのだ。どうだ、おどろいたか。ワハハハハ」

逃亡

ここは十三号室、天井にはわびしい二十ワットのあかりがともっている。もう夜の十時をすぎていた。

原田栄助は、すっかり元気がなかった。

「ああ、あの悪魔医者のために、こんなみつともない顔にされてしまった……」

くやしそうにつぶやいている。冬彦には、なぐさめることばもなかった。

それにしても、顔も、声も、身長も、ことごとくおなじ人間をつくることに成功したとは、悪魔博士は何という天才であろうか。

しかし、冬彦にとってふしぎでならぬことは、指紋の形まで変えてしまったという点である。指紋というものは、生れてから死ぬまで、一生変らぬはずだ。たとえ手術をほどこしても、酸でやいても、ふたたびひふがもり上がってくると、おなじ指紋になるのである。

「ほっちゃん……」

三平が声をかけた。いや、三平とウリ二つの顔になった、原田栄助が声をかけたのだ。

本書、『論創ミステリ叢書』の『鮎川哲也探偵小説選』第三巻は、既刊の第二巻と併せて、鮎川哲也の書いた少年向けミステリを集成したものである。読切または連作スタイルの作品ばかりなので、第三巻単独でも充分に楽しめただけだが、できれば二冊を揃えて読んでいただきたいと思う。

前巻の解説にも書いたとおり、鮎川哲也が主に昭和三十年代に学年誌やマンガ雑誌に発表していた少年向けのミステリは、いっさい単行本化されることなく埋もれていたが、一九八八年五月に光文社文庫から作品集『悪魔博士』が刊行されて、その一部がファンの前に姿を現した。だが、予告された二冊目の少年小説集が出ることはなく、鮎川哲也の少年ミステリはアンソロジーと推理ドラマ脚本集に散発的に収録されたのみであった。

今回の『鮎川哲也探偵小説選』では、それらの作品も含めて、現在、存在が確認されているすべての少年ものを、二冊にまとめてお送りするものである。

さて、本書の収録作品の解説に入る前に、第二巻を購入してくださった方へのお詫びを述べておかなければならない。前巻の巻頭に収録した中篇「冷凍人間」に収録漏れの回があったのだ。該当の回は、本書の巻末に「冷凍人間・補遺（第六回）」として収めて補完を図ったが、本来ならばあつてはならない編集ミスであり、深くお詫び申し上げます。

「冷凍人間」は「中学一年コース」昭和三十五年四月号から九月号まで半年、六回連載されたものと思込んでいたが、第二巻の刊行後、戸田和光さんから「これ、

夏休み増刊号にも載っていた可能性がないですか？」との指摘があり、あわてて調べたところ八月号（第五回）と九月号（最終回）の間に八月増刊号（第六回）にも掲載されていたことが判明したのである。

一般の月刊誌が一月号から十二月号まででひとつのサイクルになっているのに対して、学年誌は児童の進学に合わせて四月号から翌年の三月号までがワン・サイクルである。連載小説も半年や三ヶ月で完結するものが多い。だが、戸田さんは別の作家の連載で一年間掲載されたのに全十三話だったケースがあったことから、夏休み増刊号への「出張掲載」の可能性を疑ったのだという。

抜けていたのが第六回だったため、半年連載、つまり最終回が第六回だと思い込んでいた我々は脱落に気づくことが出来なかった。実際は最終回は第七回だった訳だが、第六回がなくても見かけ上は連載回数は揃っているからである。

いや、連載の一回分がまるまる抜けていたら、話がつながらないから、いくらなんでも気がつくだろう、と思われるかもしれないが、既に第二巻で「冷凍人間」を読まれた皆さんは、特に違和感を覚えることもなく読了された方がほとんどだと思う。それには理由がある。

連載第五回（八月号掲載分）は「深夜の車」から「ふ

くろのネズミ」までなのだが、最終回（九月号掲載分）冒頭の「地下室の争い」の章は、まるまる連載第六回（八月増刊号掲載分）のダイジェストになっているのだ。そう思って読むと、この部分だけやけに駆け足で不自然ではあるが、一応、話はつながって読める。この章は増刊号を読まなかった読者への配慮として挿入されたものであろう。

つまり、これから「冷凍人間」をお読みになる方は、第二巻47ページ上段の「地下室の争い」の章の直前で一旦本を置いていただき、本書の「冷凍人間・補遺（第六回）」を読まれた後、第二巻に戻って48ページ下段「生きていた男」の章から再び読み始めていただければ、本来の発表順にストーリーを追うことが出来る訳だ（「地下室の争い」の章は読んでも読まなくても良い）。煩雑でたいへん恐縮です。

本書の編集中に脱落が発覚して、急遽、漏れた回を追加収録できたのは、不幸中の幸いであった。また、さまざまな要因が重なり合って、事前に予測するのが困難だったとはいえ、お恥ずかしい確認ミスであることに変わりはない。読者の皆さまには、改めて深くお詫びいたします。

[著者] 鮎川哲也 (あゆかわ・てつや)

1919年生まれ。本名・中川透。50年に『宝石』100万円懸賞の長篇部門へ投稿した「ペトロフ事件」(中川透名義)が第一席で入選、56年に講談社「書下し長篇探偵小説全集」の第13巻「十三番目の椅子」へ応募した「黒いトランク」が入選して鮎川哲也と改名。60年に「憎悪の化石」と「黒い白鳥」で第13回日本探偵作家クラブ賞長編賞を、2001年に第1回本格ミステリー大賞特別賞を受賞。2002年逝去。没後、第6回日本ミステリー文学大賞が贈られた。

[編者] 日下三蔵 (くさか・さんぞう)

1968年、神奈川県生まれ。ミステリー・SF研究者、アンソロジースト、フリー編集者。編書『天城一の密室犯罪学教程』で第5回本格ミステリー大賞を受賞。

[巻末エッセイ] 麻耶雄嵩 (まや・ゆたか)

1969年、三重県生まれ。1991年に『翼ある闇 メルカトル鮎最後の事件』でデビュー。2011年に『隻眼の少女』で第64回日本推理作家協会賞と第11回本格ミステリー大賞を同時受賞し、2015年には『さよなら神様』で第15回本格ミステリー大賞を受賞した。

「虫原博士の死」の挿絵を描かれた石田武雄氏、「一夫と豪助の事件簿」の一部挿絵を描かれた古賀亜十夫氏の著作権者と連絡がとれませんでした。ご存じの方はお知らせ下さい。

あゆかわてつや たんでいしょうせつせん

鮎川哲也探偵小説選Ⅲ

〔論創ミステリー叢書118〕

2019年8月10日 初版第1刷印刷

2019年8月20日 初版第1刷発行

著者 鮎川哲也

編者 日下三蔵

装訂 栗原裕孝

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

<http://www.ronso.co.jp/>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

©2019 Tetsuya Ayukawa, Printed in Japan

ISBN978-4-8460-1818-4